平成１８年度まちづくり講演会　講演録

演題　心あるところに宝あり

講師　株式会社イエローハット　取締役相談役　鍵山秀三郎　氏

講師プロフィール

昭和８年８月東京生まれ。昭和36年10月 「ローヤル」を創業。当初は自転車１台の行商からスタートするが、現在では小売り店「イエローハット」を全国に展開。平成10年６月に取締役相談役に就任し現在に至る。

一方、会社創業の頃から現在まで、一貫して続けてきた「掃除」においては、その哲学に学ぼうという有志の集まりである「日本を美しくする会」の活動として「掃除を学ぶ会」が全国各地で開催されるまでになる。

サザンクス筑後　小ホール　18:30～

皆さん、こんばんは。今日は、大勢の皆さんの前に呼んでいただきまして光栄でございます。先ほど、桑野市長さんからご丁寧なご紹介をいただきました鍵山でございます。私は、胸をはって誇れるような経歴も何もございませんけれども、あと４カ月足らずで７３歳になろうとする今日まで、いろいろなことを体験してまいりましたので、その体験の中から学んだこと、また、多くの人から教えていただいたことを交えて皆さんにお伝えをさせていただきます。よろしくお願いいたします。

私の人生を短い言葉で表現をいたしますと、人が省みないような、取るに足らない小さなことを大事にして、そして、それを大事に、大事に育ててきたというのが、私の人生でございます。もうひとつ別の表現をいたしますと、誰にでもできる簡単なことを、誰にもできないほど続けてきた、というのが私の一貫した生き方でございます。「誰にでもできる簡単なこと」ですから、私の真似をしようとすれば、誰でも真似ができるんですけれども、ほとんどの方が、長く継続することができないですね。なぜかというと、私のやっていることは、すぐに効果が出たり、大きなものを得たりする、成果が手に入るというものとは違って、一見遠回りで、やっても、やっても、努力をしても一向に成果が手に入らない、そういうことなんですね。ですから、そんなつまらないことをしていたのでは、人生の競争に負けてしまうということで、ほとんどの人が途中で止めてしまう方ばかりでございました。私は、幸いにして忍耐心、我慢する心が強かった、もうひとつは継続するという意思が強かったということもあって、人が去っていっても、一人になってもこれをやる、こう

いう考え方でやってまいりました。そのおかげで、人様が１０の努力でできることを、私は１００も２００も努力をしてまいりましたので、多くの体験、経験が豊富ですね。簡単に成果が手に入る場合には、経験というのは少ないわけですけれども、私のように遠回りをして、たくさんの努力をしてきた人間は、同じ成果を手に入れるにしても、人の何倍もの経験を積んでおります。

豊富な経験というのは、誠に貴重なものでして、どういうことかというと、経験がたくさんある人は余裕があります。経験のない人は余裕がないですね。ですから、子どものときから頭が良く、試験の点数も良くて、良い学校にどんどん行って、良い地位に就いたというような人は、確かに頭は良いでしょうけれども、経験が乏しいですね。そのために、子どもが考えてもおかしいようなことを平気でやってしまう。最近の世の中をご覧になると、良くお分かりだと思います。そして、何か起きるとパニックになって右往左往する、ますます間違ったことをするとか、こういう人が多いですね。これは、経験がない故に余裕がない、そういうことだと思います。

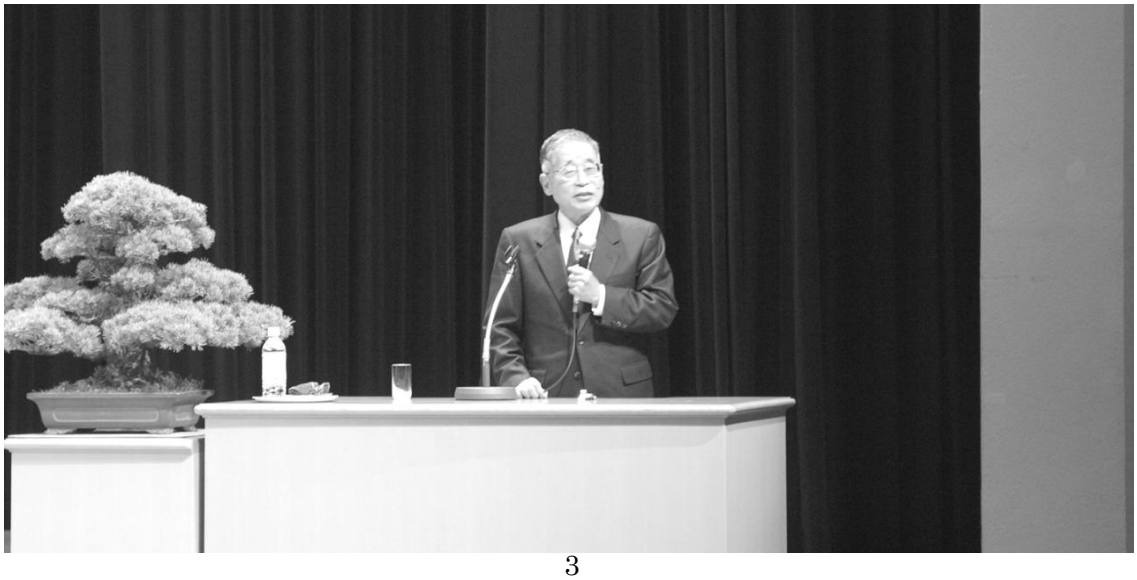
ということで、多くの経験をする、そして、そのことが身についているということは、必ず、心の余裕というものが生まれてくる貴重なものだと思っていただきたいと思います。ただひとつ、経験には欠点がひとつあります。それはどういう欠点かというと、一度経験してしまうと経験する前には戻れないということです。例えば、自転車でも、最初の頃は転んで擦りむいたりしますけれども、一旦乗れるようになると転べなくなるんですね。こういうふうに、経験というものは、一度経験をしてしまうと、経験する以前には戻ることができないですね。水泳で、最初は泳げない人は水を飲んだりしますけれども、一度泳げるようになると、もう溺れることはできないですね。水泳のできる人は、身投げができないと言いますけれども、このように経験にはひとつだけ欠点があるんです。だとしたら、悪い経験はしない方がいいですね。悪い経験をしてしまうと、それがずっと終生残ってしまう。ごみひとつ捨てるという経験、タバコの吸殻ひとつ捨てる、缶ひとつ捨てる、これも悪い経験ですから、それは、やった後は、やる前には戻れないわけですから。ということもありまして、悪い経験は絶対しないように心がけていく、これがとても大切なことでございます。

今日は、筑後市の皆さん方に、何を期待して私が来たかというと、いくつもありますけれども、まず冒頭に、頭の良い人になってもらいたいと思ってまいりました。頭が良い人というと、試験の点数がいつも良くて、例えば学校であればいつも１００点を取ってくるような人、あるいは、有名な大学、九州であれば九州大学とかですね、そういうところを出た人が頭が良い人、とみんな思うんですけど、私が言う頭が良い人というのは、全く意味が違います。誰でもできるんです。それは、良い事を考える人が、本当に頭の良い人です。たとえ九州大学を出ても、あるいは、京都大学を出ても、東京大学を出ても、悪いことを考える人は、それは頭の悪い人だと私は思うんですね。私のように東京で戦災にあって、岐阜県に疎開をして、疎開先で百姓をしながら農繁期には学校も行かないでかろうじて田舎の高等学校を卒業したという程度の人間でも、いつも良い事を考え続ければ頭が良くなっていくということで、本当の意味での頭の

良い人だったら、ここにいらっしゃる皆さん全員が、いや、筑後市の市民の皆さん全員がなれるわけですから、どうか、真の意味で頭の良い人になっていただきたいと思います。

私はいろいろなことを努力して継続をしてまいりました。その中でも、先ほど桑野市長さんからご紹介をいただきました「掃除」というのは、最も私が心を込めてやり続けてきたことでございます。そのご縁で、「掃除」をしてきたからこそ、武久さんにご縁ができて、そして武久さんのご縁で皆さんの前に立たせていただいたわけですが、この「掃除」も随分と昔は人に嘲笑をされたり、馬鹿にされたり、掃除しかできないのか、もっと成果の上がることができないのか、そういうふうに人に馬鹿にされたり、嘲笑されたりしてまいりましたけれども、私は止めなかったんですね。なぜかと言うと、自分の暮らしの、住まいの環境、あるいは職場環境、これをきれいにするくらい意義の高いものはない、逆に言えば、どんなに売上、利益を得ていても、職場がいつも汚れていて、人の心が荒んでいれば、そんな会社は何の意味も無い。会社が存続できなければいけませんけれども、いつも乏しい利益で、かろうじて会社を守っているとしても、その会社がいつも職場環境をきれいにして、地域の方々に喜ばれているような会社であるならば、その会社は存在の意義がある、そういうふうに思うんですね。

普通、会社の評価といいますと、その会社の売上がいかに多いか、利益が多いか、前年に対してどれだけ増えたかということが評価基準になりまして、それが多いほど良い会社と言われるんですけれども、私は、会社というものに対して、全く別の物差しをもって計っております。どういう物差しを持っているかというと、その会社が人を幸せにしながら、成長をしている会社であるか、人を不幸せにしながら膨張をしている会社であるか、そういう物差しなんです。この物差しで、今、日本の多くの会社を計ってみると、膨大な利益を上げているけれども、人を不幸せにしながら膨張しているという会社はたくさんあるんです。一方、名も無い、人には知られていない会社ではあっても、いつも周囲を良くして、地域社会に貢献をして、そして、人を幸せにしながら成長をし続けているという会社もあります。どっちが良いか。やはり、長い目で見て、国家のためには、あるいは地球のためには、人類のためには、人を幸せにしながら成長をしている会社が一番良いと、私はそう思います。できれば、筑後市にある会社がみ



んなそういう会社になって、そして、まず市を良くする、そしてそれが福岡県を良くし、九州を良くし、日本を良くするような、そういう会社であっていただきたいと思いますし、また、会社ではなくても、一個人がそういう考え方、生き方をしていただきたいと思います。

先ほど、待合室で筑後市の皆さんがどういうことをやっているかということを、パンフレットで拝見をしてまいりました。そうしましたら、本来ごみになりそうなものを分類をして、きちっと資源化しているということも写真で拝見しまして、私はそういうことにものすごく関心を持って、実際に自分でも毎日のようにそのことに取り組んでおりますので、「ああ、こういうことをきちんとやっている市というのは、良い市だな」また、そういう市に住んでいらっしゃる市民の方は、自分では気が付かないけども、良い市に住む市民で、お幸せだと思います。

一方、私は全国を歩いておりますと、ごみは何の分類もせず、全部一緒にして処分をしてしまうという地域もあるんですね。分類をすると手間がかかる、暇がかかるということで、全部一括して処分をしてしまう。その中には貴重な資源もたくさんありますね。例えば、アルミの缶なんていうのは、どのくらい価値があるかというと、アルミ缶１個、３５０ｃｃのアルミ缶１個をごみにしないで一個救うと、４０ワットの電球が８時間つけられる電気が節約できるんです。あの缶を６０個集めると、１ｋｇのアルミのインゴットが１本できるんです。６００個集めれば、１ｋｇのインゴットが１０本ということで、大変電気の節約になります。そういうことで、私はよその家のごみでも開けて、アルミ缶がごみとして捨てられているとひっくり返して、その中からアルミ缶を集めてきて資源に出すくらいしております。ときには、それによって喧嘩になったこともあります。去年の１０月には１１０番でパトカーを呼ばれたこともあります。「他人のごみを勝手にいじって、そういう資格があるのか、見せろ」と言われて、「そんなもの持っていない」と言ったら、１１０番で警察を呼んだ人もいたんです。でも、若いおまわりさんが来て、「あなたの言っていることは、確かに理屈だけども、この人たちは毎朝、この広い範囲を雨が降ったって掃除しているじゃないですか」「そのおかげでこのまちがきれいになっているじゃないですか」と説得していただき、「これからも続けてください」と私を励ましてくださいました。

いろいろなことがあります。良いことをやったからと言って、誉められることよりも、けなされたり、あるいは、トラブルに巻き込まれたりすることもあります。でも、私は、良いことは絶対にやり続けよう、そういう決意を持ってやっております。

このアルミ缶で、ものすごく貢献している中学校が、広島県安佐北区というところにあります。日浦中学校という学校で、この学校では生徒が毎日アルミ缶を集めて、そして、それを売却し、そのお金で車椅子を買って、今までに４４台の車椅子を献納してきました。アルミのインゴットに換算しますと、今までに４，６００本のアルミを集めていますから、大変な貢献をしているわけですね。こういう感心すべき中学生もおります。ですから、今の子どもはどうとか、今の若い者はどうとか、ということではなく、立派な少年少女もいる、立派な青年もたくさんいる、こういう人たちが日本の国を良くしてくださる、そういうふ

うに思います。

さて、「掃除」の話に戻りますけれども、私の両親がものすごく掃除を熱心にする両親でございましたから、本当にきれいな家庭に育ってまいりました。こういう角なんかもですね、両親が年中磨くものですから、本来だったら角が四角いものが、みな丸くなって、柱の角もとれちゃっている、玄関の格子戸なんかは細くなっている、子どもの頃のときを良く覚えているんです。私たちは５人兄弟で、子どもが廊下を歩くと、その足跡が気になって、足跡を全部拭いてしまう。ですから、私の家には泥棒が入りにくいと思いますけれども、そのくらい、私の両親は、掃除をよくしておりました。ですから、子どものときは、それほど「掃除」が大事だとは思いませんでしたけども、二十歳になって、岐阜県の山奥から東京に出て就職をしたときに、入った会社がとても汚くて、自動車関係でしたので、油で汚れてほこりだらけで、とても汚れていまして気になってしょうがない。そこで、私はその会社に入ってすぐに掃除を始めました。徹底してですね。先輩から随分いじめられました。「今度、生意気なやつが来たんで、みんなでいじめて追い出しちゃえ」ということで、私のことをみんなでよってかかっていじめたんです。でも、私はそんなことには負けることはありませんでした。

そのことを坂村真民という方の詩の中に、「いじめられて強くなり　いじけてしまってはだめ」という詩があります。この詩は５小節でございまして、最後に残りの４つは皆さんにご紹介します。「いじめられて強くなり　いじけてしまってはだめ」、筑後市の学校にはそういうことはないでしょうけども、方々の学校では、残念ながら弱い子どもをみんなによってかかっていじめたりする例もあります。そのときに、そういうことに負けてしまって、いじけて、そして学校へも行かなくなるという例も少なくないようですが、いじめられてもいじけない、これがとても大切なことでございます。

そして、その会社に８年あまりお世話になりまして、最初に入ったときは汚い会社でしたけども、私がその会社を退社するときには、本当にきれいな会社に変わっておりました。できれば、その会社で一生職を全うしたかったんですけども、その会社の経営者の経営姿勢が、私にはどうしても相容れないことがありまして、そこで、その会社を辞めて、昭和３６年１０月１０日、今から約４５年前に、自転車１台の行商から、この会社（現株式会社イエローハット）を始めたんです。２年８カ月、自転車に荷物を積んで、１件１件歩くという仕事を続けてまいりました。私は体が丈夫でしたから、自転車にたくさんの荷物を積んで、遠くの方へ行くのも、そう苦ではありませんでした。しかし、東京は坂の多い町でございまして、どっちへ行くにしても坂を降りたり、上ったり、降りたり、上ったりしなければならない、そういう町でございます。そういう中を、雨が降っても、雪が降っても、自転車に荷物を積んで歩くということは、容易なことではない。しかし、そういうことには耐えることができたんですけども、私が耐えがたいことがあったのは、行った先々で人間扱いされないということです。どこへ行っても、親切にしてもらうということがないんですね。そういう辛い思いをいたしました。でも、じゃあ、全部不親切な人だったかというと、そうではない。ごく稀でしたけれども、本当に親切な人、「この人は人間かな、観音さ

まではないか、観音さまが人間の姿をして、今ここにいるんではないか」と思うほど、親切な人がいらっしゃったんですね。

何度もこの話を方々でしておりますから、何度目かの人もいらっしゃるんで、申し訳ありませんが、初めての方にご紹介をいたしますと、昭和３７年の２月、まだ、仕事を始めて半年も経たないときに、みぞれの降る寒い日に、私が、いつものように自転車に積んで歩いておりまして、ある１軒のお店に入ろうとして･･･。大体、そういう日は入りにくいです、カッパからしずくが垂れる、だから余計入りにくい。カッパを脱いで中へ入ろうとすると、それでも帰れと言われて、今脱いだばかりのカッパを着なければいけない、中からそれを指差して笑っている。それを背中で感じるわけです。そういう経験も度々しております。あるお店に入ろうとして、カッパを脱ぐ前に、この中の人たちが入れてくれそうかどうか、中の様子を伺おうと思って、ドアを開けて中を見たら、中から手が出てきて、私の右手の袖をカッパごと掴んで引っ張っていくんです。それだけではない、頭の上から「今日は寒いでしょう、お入りなさい」と言って、本当に明るい朗らかな声がおりてきました。こんな濡れたカッパを着て入っていいのかなと思ったんですけでも、親切な声と、引っ張られるその力に誘われて、そのお店に入りました。中はガスのストーブが燃えて暖かい、そういうお店でした。なんと、その人は、私の後ろに回って、私の濡れた肩を抱いて、奥に燃えているストーブの方へ押していってくださいました。ストーブの前に来たときに「手が冷たいでしょう、あたりなさい」と言って、あたかも大事な人をもてなすかのように親切に、私に声をかけてくださった。そして、そばにあったテーブルにお団子が置いてありまして、その団子をとって、私にくださった。「おあがんなさい」と言ってくれた。私はその団子をいただいて、その方のように、明るい朗らかな声で「ありがとうございます」と言おうと思ったんですけども、声が出なくなったんですね。この団子を持って、ただ３度も、４度も、頭を下げるしかなかった。世の中にはなんと心の温かい人がいる、私もこの人のようになろうと思いましたね。この人ほどにはなれないけれども、この人のような人間を目指して歩こうと私は心に誓った。一方、私に冷たい態度で接する人たちからも学びました。私はこういうことは絶対しない、人が嫌がるようなこと、辛い思いをしている人に追い討ちをかけるようなことは絶対しない、そういうことも心に誓いました。ですから、私はその通りの人生が歩けたかというと、その人ほどにはなれてませんけども、そういうことをいつも心がけてまいりました。

そして、そういう私のもとに１人、２人、３人と社員が来るようになりましたけども、この人たちの心がとても荒れておりました。学校卒業してすぐの人は一人も来ない、みんな、方々渡り歩いた人たちばかりでしたので、みんな心が荒れておりました。この荒れている心をどうやって穏やかにするか、と思って、穏やかにするためには職場環境をきれいにすることが第一である、かつて両親がいつも家をきれいにして、子どもの心を落ち着かせるようにしてきたように、私も社員のために職場環境をきれいにして朝迎えよう、また、仕事から帰ってきたときも、いつもきれいな職場にしようと心に誓って、朝早くに行って掃除をしました。とにかく、ちょっとでも時間があれば、片付けたり掃除をしたり、特にト

イレは１日に２度も３度も掃除をしたんです。じゃ、そうやったら社員は穏やかになったかと言うと、なかなかそれが効果が出なかったですね。２年たっても、３年経っても効果が出ない。私がトイレ掃除をしていると、その横に立って、平気でトイレを使っているというような、そういう社員もおりましたし、さっき掃除していたのに、後で行ってみたらもう汚してあるというような、そういうことが続きましたね。でも、それを私は止めなかったんですね。でも、虚しい思いや儚い思いはしました。

虚しいな、儚いなと思うと、誰でも嫌だな、もう止めようかとなるわけですけども、ほとんどの人が、もう止めようかと思った途端に止めているわけですが、私は止めなかった。どうやって乗り越えてきたか、人からよく聞かれます、「嫌だな、止めよう、と思ったのに、どうして止めないんですか」と。私がどうして止めなかったか、それは、昨日までの努力が、昨日まで自分がやってきた努力が、捨てるには惜しい努力であった、それだけ一生懸命努力をしてきた、だから、今日止めれば、昨日までの努力が無駄になってしまう、昨日までの努力を無駄に捨て去るような、そんなあまい努力はしてこなかった、ですから乗り越えてこれたんです。どうか、皆さん方も、何をやるにしても、今日１日、自分自身の良心に恥じない努力を、明日もする、あさってもする、ことをやれば、必ず、それを止めるというような気持ちにはならない、そう思いますので、ぜひ、そういう気持ちで取り組んでいただきたいと思います。

人間というのは、何かを始めるとき、１万枚の紙を扱ったようなものでして、目には見えない紙ですけども、今日、３つでも、５つでも、良い事をする、前向きな事をする、プラスになる事をすれば、この紙はその度に１枚ずつ増えて、５つ良い事をすれば５枚増えるんです。１万枚のものが、１万５枚になったって、増えたかどうか分からないですね。明日もやって、１万１０枚になったって、増えたかどうかは分からない。ということで、「こんなことしたってしょうがない」と言って止める。今度、マイナスのことをすると、９，９９７枚になろうと思います。３枚減ったって分からない、６枚減っても、１０枚減っても、３０枚減っても分からない。ところが、毎日マイナスのことを続けていくと、これが１００枚減り、５００枚減り、１，０００枚減りして、３，０００枚も減り、５，０００枚も減ると１万枚が随分減ったなということに気が付くわけで、片や、１万枚の紙を１万３，０００枚にした人と、１万枚の紙を５，０００枚に減らした人との差は、２倍以上の差がついているわけでして、人生というのはそういうものでございます。

日々、今日１日は分からない、３日や５日では分からない。１００日や１年では分からないけれども、３年、５年と積み重ねると良いことをし続けた人と、マイナスのことをやり続けた人との差は大きな差になって現れてまいります。ですから、どうか、こんなこと

講演翌日　筑後小学校でのトイレ掃除風景
主催：筑後師弟法人会　筑後小学校　筑後小学校PTA

をしたってしょうがないじゃないか、と思うことであっても、良い事であると思うことはやり続けていただきたいと思うんですね。

そういうことで私がやってまいりまして、１０年を過ぎる頃から社員の人たちが（掃除を）やるようになりました。２０年経つ頃には、ほとんどの人がやるようになった。３０年経った頃には、外からトイレ掃除のやり方を教えて欲しいと言って、研修に訪ねてくる会社が続々と現れるようになってまいりました。それが元になって「日本を美しくする会」というものが誕生をいたしました。今、九州にもたくさん、その運動の拠点がございます。方々で、学校や、あるいは駅や公園のトイレ掃除をするという方たちが増えてまいりました。

中国の教訓で「１０年偉大なり」という言葉があります。１０年間やり続けると偉大な力になるということ。もう１０年、「２０年恐るべし」といって、２０年やり続けると、恐

講演翌日　筑後小学校でのトイレ掃除風景
主催：筑後師匠法人会　筑後小学校　筑後小学校PTA

るべき力になるんです。「３０年にして歴史なる」といって、ひとつの歴史とも言える出来事になるという教えでございまして、私は掃除をやり続けてきて、この言葉は本当だというふうに確信を持っております。さらに、もうひとつ、４０年は無いんですけども、「５０年神の如し」という言葉がついておりまして、私は、まだ５０年に至っておりませんので、果たしてこの言葉が本当かどうか、３０年までは確信を持っておりますが、その次の５０年はまだ分かりませんね。もしかしたら、そこへ行くまでに仏様になってしまうかも知れませんので、これだけは皆さんに約束はできないですけど、できれば、もうあと５～６年命があれば、中国から伝わってきた「１０年偉大なり」「２０年恐るべし」「３０年にして歴史なる」「５０年神の如し」ということが本当であるということを確認したいと思っております。

さて、ここで、古いＶＴＲでございますが、そろそろ、ＶＴＲの準備をお願いいたします。もう、１５～６年も前に、うちの会社で撮り続けてきたＶＴＲを、あちこち継ぎはぎにして、今日持ってまいりましたので、今日は皆さんに画面で見ていただきたいと思います。私の話だけでは分かりにくいところが、画像で見ていただければ分かりやすいと思います。これは、画像を私が説明をさせていただきます。

一番、最初に出てくるのは、古く、うちの会社が大田区北千束というところに本社があったときに駐車場の一角に、こういう道路掃除をするための道具が置いてある場所がありました。これは、表の掃除をするために必要な道具ばかりです。今は、もっとたくさん道具が揃ってますけども、１５～６年前もこう

やって道具がきちっと揃って、ここへ来れば必要なものが何でも手に入る、探さなくても分かるように、こうしていつも整然と置いてあったんです。早く来た人が道具を並べて、後から来た人がすぐに掃除にかかれるように用意をしておきます。そうしますと、みんながここへ来ては、あっちこっちへ散っていくわけです。

これは、２５年間お世話になった東急電鉄の駅、うちの会社は昭和５１年から２５年間、駅の掃除をしてきましたけども、駅の人は１回もやったことがありませんでした。それから、こういう排水溝ですね、全部詰まってましたね。それを、こうやって掘って中のものをさらって、こういうふうに変わるわけですから、ものすごくきれいになりますね。気持ちが良いですよ。もし、皆さんのご近所に、ああいう詰まっているものがあったら、きれいにしてください。私が方々行って、詰まっているところをきれいにすると、本当に気持ちが良いです。行ったところで、詰まっていないとつまらないっていうくらいですね。ご近所の方が、ごみをだらしがなく、本来分別すべきものを分別せずに捨てるんで、うちの会社で、こうやってひっくりかえして、分類をしなおして、燃えるごみと燃えないごみと資源になるものを選り出して、回収をしてまいります。これでトラブルになることが、よくあるんです。人の家のごみをいじるなと言ってですね。でも、私は止めませんでした。こうして、きちっと分類をする。回収に来た人が喜びます、「助かります」と言ってですね。そのときに、資源になりそうな新聞、雑誌、ダンボール、そういうものを車を出して回収をしてまいりまして、業者の人に指導を受けた通りに分類をしなおすんですね。毎朝、これを、こうやって分解をしてやっておりますので、うちの会社の事業だと思い込んでいる人もたくさんおりましたね。３人の方が、いつも届にきている人がいましたね。

ご覧のように、ダンボールでもきちっと縛りますから、ものすごくかさばっていたものが、何分の１かの体積になります。それで、１週間にトラック１台集まりますから、いかにごみを減らして資源化してきたかということがお分かりかと思います。今でもやっています。

使った道具は、必ず洗って元へ戻します。汚れたまま元へ戻すことはありません。ごみの中から集めてきたビン、缶は、とても汚れておりますので、ああやって洗って、汚れをとって、水を切って、そして、缶潰し機というので、潰して、体積を小さくして、そして1 週間分まとめて資源回収に出すんですね。ごみの袋も、よその家のごみを整理したときに空いた袋を洗って、干して使う、そのくらい徹底してるんです。ごみ袋だってごみになりますよ。ですから、ごみ袋も新しいものは使わない。

本来これは、役所がやるべき仕事なんですけども、道路の植栽、なかなか予算がないと見えてやらないんで、うちの会社でこうして、随分広い範囲、植栽の手入れをしたりですね。道路に出っ張っている街路樹の枝を落としたり、そして、取ったものはご覧のように堆肥にして、地域の農園で使ってもらっているんです。ですから、ごみが出ないんです。街路樹の枝は長いですから、機械で切って、そして、こうして積み込んでいくんです。落ち葉、草、街路樹の枝、全部こうやって堆肥にします。どうか、筑後市でもやっていただきたいと思います。ごみが激減します。

次は、うちの会社、社員が帰ったあと机の上には紙１枚置いていないということです。こういう会社なんです。ぜひ、これも真似をしていただきたいですね。何でも置いておいて、「いつか要るだろうという」そういう考えは仕事の能率を悪くします。

次が「日本を美しくする会」のもとになった、トイレ掃除でございます。私は、昔は５時頃に行っていましたが、この頃は６時に会社へ行って、そして、お湯を沸かして、沸かしたお湯で洗剤を薄く溶かして、その洗剤液で掃除をしました。うちの会社はもともときれいですから、ほとんど道具は要りません。わずかな洗剤があればきれいになります。こうして溶かした洗剤液を撒いて、手で隅々まで掃除をしていくんです。あの便器の横、私が昔、ああやって、やっていると、あの横に立って平気で用足しをしている社員がいたんです。その度に随分、私にはしぶきもかかっていると思います。私は怒ったことはないです、情けないとは思いましたね。いつかはこんな非常識な社員が一人もいない会社にしてみせるというふうに心に固く誓ったんです。お陰さまで、今はそういう社員は一人もおりません。「やれ」と言ったってやる者はいないです。やはり、人間は決意をする、固く心に誓うということが大事ですよ。この決意というのは目には見えないですよね。手で触れることもできない、しかし、その人の心の中にある固い決意というのは、その人の日頃の態度や行いに表れるんです。決意の弱い人はですね、態度も甘いです、行いも甘いです。やはり、固い決意を持っている人は、全てにわたって、その人の態度、あるいは行いに表れてまいります。ということで、心に深く誓っていただきたいです。

この「みずこし」ですね、平成５年１１月に岐阜県明智町という小さなまちの駅のトイレ掃除をしたときに、ものすごい汚れておりまして、駅の人はこれを外して掃除するって知らなかった、まあ、もともと掃除もしていなかったですね。汚いトイレでですね、外そうとしても、なかなかこれが外れなかった、それを外して、ものすごい汚れているものをこうやってきれいにしてですね、２時間以上もかけて、一人がですね、磨き上げて、最後は沸騰したお湯につけてきれいにしたとき、さっきまで汚かったものが、あまりにもきれいになって、やった人が大感動して、あの水越でビールを飲んで、乾杯をしたという、そういうことがあったんですね。

人間は感動をすると、相当なことができますよ。感動しない人は何もできません。やはり、人間は物事に感動する心を持つということが大事でございます。道具がなければ、タオル１枚でああやって床の水を取ることもできます。こういうこともやりながら、経験から学んだことでございます。

うちのようなきれいなトイレでも、一カ所掃除するのに、約４５分くらいかけてやってまいりました。ここまできれいにいたしますと、全く臭いがしない、ですから香水も消臭剤も必要ない、この中で食事をしても大丈夫なくらいでございます。

次が、うちは車の商売でございますから、約４００台の車が、沖縄から北海道まで全国、１年３６５日休み無く動いております。この車は、必ず会社を出るときにはきれいに洗って出る、汚れた車では出ないということが鉄則になっておりまして、汚れたまんまで出かけるということはいたしません。みんなでよってかかって、こうしてきれいにするんです。

たくさんある車をみんなでするから早いです。北海道の営業所、札幌の営業所なんかは、今年は雪の中に車が埋まっているということもよくありました。雪が多かったですから。それでも雪の中から車を掘って出して、そして、凍っている車を洗うんです。せっかく洗っても、すぐに汚れるんですけど、それでもきれいにして出かけるというくらい徹底をしてまいりました。

「凡時徹底」と言って、平凡なことを徹底してやるというのは、こういうことでございまして、今日は雪が降っているから良いじゃないかとか、もうじき雨が降りそうだとか、そのうちまとめて一気にやろうなんて、大体やらない人の共通点は、そのうちまとめて一気にやろうと、まだ、それで終わる人は良いんですけでも、「そのうち、まとめて一気に誰かが」と言って、自分はやらないですね。私はそうではない。毎日できるだけ、少し、できるだけ私が、というふうにしてやってまいりました。

次は、掃除とは関係がないですが、私は人を喜ばすということを考えておりまして、ホテルへ行きますと、こういうもの（アメニティ）が置いてあるんですけども、私はほとんど使わないんです、洗面道具も。今日も持ってきております。今日は、こちらで泊まって、明日は人吉で泊まるんですけども、いつも自分の洗面道具を使って、ホテルに置いてある、ああいうものは使わないようにしてるんです。なぜか、私がホテルに置いてあるものを使えば、全部資源が無駄になってごみになるんです。年間、３分の２くらい私はホテルを回ってますから、１年分の洗面道具がごみになると大変なごみになるんです。１０年だったらものすごい量ですね。それを、私は使わないようにして、枕も使わないように、浴衣も使わないように、同じ部屋を２泊、３泊するときは、「この部屋は今日も使いますので、何も変えなくていいです」、こういうことを書いて、ドアに挟んで出かけるようにしているんです。

ありがとうございました。これでＶＴＲは止めてください。

このように、私のような考え方の人が、だんだん増えてまいりまして、近頃はホテルに置いてあるものを使わないという方が増えてまいりました。昔、私がこういう話をしたときに、「私も使いません」とおっしゃた方が、随分前ですけども一人いたんです。「めずらしいな、私と同じ考えの人がいるんだな」と思って「ありがとうございます。ぜひこれからも続けてください」と言ったら、「私は、全部持って帰ります」というふうに言っていました。料金を払ったら、使わなきゃ損だという、これは実にあさましい考え方で、例え料金の中にそれが全部含まれていても、そのくらいのものは残してこようという、使い切らない、自分の与えられた権利は使い切らないという、これがとても大切でございます。

皆さん方が筑後市にお住いになって、市民としての権利はたくさんある、しかし、その権利を全部使い果たさないで残すようにすれば、市の、行政の負担はぐっと軽くなるわけです。それを使い切って、なお、その上にあれもやれ、これもやれということになれば行政の負担は重くなって、ひいては、それが、結局は皆さんの肩にかかってくる、皆さんが逃れたものは、それは皆さんの子孫にかかってくるわけです。

ということで、自分に与えられた権利は使い切らない。ごみも極力分類をして、そのごみを減らす努力をする。私の家なんかは本当

にごみを出さないですよ。なぜか、こんな紙切れでも全部紙を分類して資源として出しますし、窓空き封筒、セロハンの貼ってあるものですね、あのセロハンは切り抜いて、そして紙は紙で出す。ホッチキスも取る、テープが貼ってあったら、そのセロテープも取る、そうやって厳密に異物が入らないようにして出すんですよね。それから、うちの会社は、もちろん私の家でもそうですけども、ペットボトル、近所から集めてきたものもですね、全部このシールを取って、シールとキャップと分けて、本体とキャップとシールと３つに分けて、そして資源として出すんです。そうすると資源の価値が出ますけども、これをそっくり出しますと、これは全部材質が違いますので、材質の違うものが混ざると、資源の価値は低下するわけですね。こういうふうに、ものすごく、うちの会社は厳密にしております。近所のものまで集めてきてやっております。この上によく１点とか２点とかシールが貼ってありますね、それまで全部取って、しかも、これは色別に分けて、ここまでやるのかというくらいにですね。回収にくる産業廃棄物の会社の人がですね、日本中にこういう会社は他には絶対にないと、おりがみ付きです。以前は、うちがお金を払って持っていってもらってたんです。今度、新しく来た人は、逆に資源として買いたいくらいだ、こういうふうにおっしゃった、そのくらいやっているんです。

私が、方々でこのペットボトルのキャップを集めてますといって、話をしてあるいてましたら、去年、夏の暑いときに大阪でお医者さんの研修会がありまして、お医者さんの集まりで、私がこのキャップを集めて資源化していますというふうに話しをしたら、帰りに、お土産ですと言って、このペットボトルのキャップ一袋持たされて帰りましたね。大阪の土産には、確か塩昆布とか、もうちょっと良いものがあったと思いますが。でも、それを置いとけばごみになっちゃうんです。それだけごみが増えて、資源が無駄になるということで、ありがたくいただいて帰って、会社で分類をしております。そのくらい徹底をするんです。何事でも徹底をするということが大事でございます。

私の人生は平凡なことを非凡に努力する、ごくあたり前の平凡なことを、非凡に努力をしていくというのが私の人生でございまして、何も特別なことをやったりしようとする必要はない、特別なことというのは、滅多にないんです。滅多にないことを探し歩いて人生を無駄にするよりも、平凡なことなら、目の前にいくらでも、足元に転がっているわけで、そのいくらでもある平凡な、小さなことを取り上げて、徹底して努力をしていけば、それはやがて大きな力になる、こういうことでございます。

ホテルに泊まったとき、こうやって使わないという話を、かつて、熊本県の長洲町でお話しをしましたが、その地域の方、山鹿市、長洲町ですね、それから、荒尾、あの近辺の方々が、私の行動を実際に目で確認したいといって、うちの山口の研修所に来られたこと

があります。山口の駅前の山口グランドホテルというところに、私を含めて４４人泊まられた。あくる日、うちの会社へ来て皆さんが自慢してましたね、「洗面道具持ってきたから使わなかった」「タオルも持ってきて、ホテルのタオルも使わなかった」とかですね。風呂場を使わなくて体を拭いただけで済ましたとかですね、それぞれ皆さんが自慢してたんです。ひとり、山鹿市のタケザキカズアキさん、名前まで覚えてますけれども、「この中に、私以上の人は絶対に居ない」と言って断言したんです。どのくらい使わなかったのかと聞いたら「部屋にも入らなかった」と・・・。料金は払ったけども、ロビーのソファーで一晩明かしちゃったというんです。そこまで、何もやらなくていいんですけどね。なるべく使わないで済むものは、使わないように、自分が持っていって済むものは、自分のもので済ませば資源が無駄にならなくて、そして、ごみが出ない。こんなに良い事はありません。

私は、バスタオルというのは使ったことがありません。確かにバスタオルを使えば、私も楽なんですけども、あの、普通のタオル１枚で十分拭けるのに、何もバスタオルを使う必要はない。どうか、皆さん方の子どもさん、お孫さん、バスタオルを使わせないようにした方が良いですよ。なぜか、バスタオルを使うようになったら、不器用になります。タオル１枚で体を全部拭くのを毎日やるのを、バスタオルで体を包んだだけで自分の体の水をとったら、それだけ不器用になっていくわけですね。なるべく、手足、体を使うように、使うようにしていった方が、子どもさんの教育のためでございます。という考え方で、たいした事はないように見えるんですけども、実は、積み重なると大変大きなことになるわけですね。どんな事でも、些細な小さな事の積み重ねでございまして、いきなり大きな事というのは無いですね。ということで、ぜひ、そういうふうにしていただきたいと思います。

さて、急に話が変わります。今日は、心と気持ちということについてお話しをいたします。心と気持ちというと、「なんだ、一緒じゃないか」、「同じじゃないか」、同じではありません。心と気持ちは違うものです。心というのはですね、どんな人でも変わらない、不動なもので、凛としたものです。一方、気持ちというのはころころ変わりやすいですね。例えば、今日、良い話しを聞いたから、明日の朝からごみ拾いをしようとして、明日の朝になったら、まあ今日はいいかと、ころっと変わるわけでして、１週間に一度はアルコールを抜いて、体の健康維持をしようと思っているけど、その１週間に１度が、決意したにも関わらず、来週からにしようというふうに、ころころ変わる、心は変わらないけど気持ちが変わるんです。

そして、心と気持ちを入れている器の中には水が入っております。心の水はこんこんと湧いておりまして、清水のような水がこんこんと湧いてる、しかも、それはエネルギーを含んだ水なんですね。一方気持ちの器は水が湧いておりませんので、変わることがないんですね、こんこんと湧いてこない。そして、この気持ちは世の中の、社会のルールを破ったり、ほんのちょっとした小さなことでも、規則を破ったりですね、本来やるべきことを怠ったり、自分で決めたことを止めたりする度に濁っていくんですね。そして、水が濁ってくるとどうなるかというと、忍耐心が薄れてきて、何事も我慢できないということですね。今、忍耐心が無いが故に、すぐにキレる

という状態になっている人は、みんな気持ちの器の水が濁っている人ばかりです。どろどろになってくると、もう何も我慢できないですね。なにもかも嫌になる、残念ながら自分の子どもさんの泣き声でさえ、それがうるさいと言って、それが我慢できないという人さえ現れてきました。それは、みんな、気持ちの器の水が濁っているからです。じゃあ、心から湧いている水を、パイプを通して気持ちの器に送り込めば良いではないか、パイプはちゃんとあるんですよ。本当なら、正常であれば、心の水がどんどん気持ちに伝わって、一度濁りかけた水がきれいになった、また元の気持ちに戻るんですけども、残念ながらほとんどの人が、この心と気持ちをつないでいるパイプが詰まっております。ですから、心から湧いた水が気持ちの器に移ることがない。一方、この新しい水が入らないが故に、気持ちの器の水はどんどん濁ってきている、そのために世の中が、この忌まわしい事件が増えてきてるんですね。

ここで、じゃあ、どうしたらこのパイプのつまりを取るか、これが、今日の課題でございます。実に簡単なことでございます。先ほど画面で見ていただいたように、徹底した掃除をすることによって、気持ちと心をつなぐパイプの詰まりは取れていきます。一番分かりやすい例が、よく私たちは、全国で小学生、中学生、高校生、少年達と一緒に掃除をいたします。朝来たときは「こんなことやるの嫌だな」、暗い顔して、朝家をでる時嫌だった、そういうふうです。気持ちと心をつなぐパイプが詰まってる、ところが、だいたい２時間から２時間半かけて徹底した掃除をすると、気持ちをつなぐパイプの詰まりが取れて、心の水がどんどん気持ちに伝わってますから、さっきとは、全く人が変わったように明るくなって、「今日はやって良かったです」「来て良かったです」「最初は嫌だったけど、途中から汚れが取れるのが面白くなりました」「家に帰ってもやりたいです」というふうに変わるんです。それは、心と気持ちをつないでいるパイプの詰まりが取れて、そして、心のきれいな清水が気持ちの器を満たして、そして、朝濁っていた水がきれいになった、こういう証拠でございます。これは、なにも子どもに限りません。大人もそうです。大人だって、私たちは、学校の掃除だけではない、月に１回東京の新宿の駅の周辺の掃除をしております。新宿の歌舞伎町というのは、日本一犯罪の多い、いかがわしい商売をしている、汚らしいごみだらけの町でございました。もう、あと２カ月で私たち活動が始まって３年経ちますけど、もう３年足らずの間に新宿のごみは激減をいたしまして、犯罪が、新宿警察の話しによりますと、３０％減少したということです。さらに、いかがわしい商売をしていた人たちが、どんどん歌舞伎町から出て行っている、こういう報告を聞いて、本当に良かったと思います。

だいたい１回が、少ないときが１３０人くらい、多いときは１８０人くらい、今までに２度、１，０００人集まった会が、２度行われておりますが、それによって、徹底した掃除をすることによって、やった人のパイプの詰まりも取れるし、その姿を見ている人たちの心のパイプの詰まりも取れていくんですね。私たちが、掃除をしている頃、よからぬ人間がたくさんおります。客引き、お店の前に立って見張っている人間、いずれもたちの良くない人ばかりです。そうい人たちの立っている足元の掃除をしてきました。そして、踏み

板の下に入っているごみも取ってきました。一度もトラブルが起きておりません。１回や２回、そういうトラブルが起きるかなと思ったけども起きていない。やはり、私たちの一生懸命の姿が、よからぬ人たちの心と気持ちをつなぐパイプの汚れも取っている、こういうふうに思うんですね。ということで、ぜひ、皆さん方もそういう活動をしていただきたい。この活動がいかに優れているかということは、２，５００年前にお釈迦様が、もう、証明をしておられるわけです。掃除の功徳といって、５つ挙げておられる。ひとつは自身清浄といって、掃除をすると自分の身も心も清められる、きれいになるという。２番目は掃除をしている人の姿を見ている人の身も心も清めることができる。皆さんも覚えがありますよね。掃除をしている人の姿を見ただけで、自分の気持ちが良くなる。ということで、人の心も清めることができる。３番目はすべてのものが喜んで生き生きとしてくる。これも本当です。私たちが新宿歌舞伎町の掃除をしますと、掃除をする前の町、掃除をした後の町では、がらっと空気が変わって生き生きとしてくるんですね。４番目は、すべてのものが整ってくる、これも本当です。会社もだんだん整ってまいります。５番目は、まだ、私も確信が持てないんですけども、死後、つまり、死んだ後、天の上で生き返ると書いてあるんですが、これはまだ、私も実験をしておりませんので、もうあと少し待っていただかないと証明ができないんです。あまり、急がないでいただきたいですが。お釈迦様のおっしゃたことですから間違いないと思いますね。どうか、皆さん方も、このお釈迦様の教えを守っていただきたいですね。

最後に、もう少し時間が残っていますので、人間の存在感というものが、どういうものであるか、数字を使ってお話をいたします。

博士の愛した数式という本が、ベストセラーで今でも本屋さんにたくさん置いてあります。映画にもなりました。私は、この本をうちの女性社員に薦められて、とっても良い本ですよと薦めてくれたんですけど、本はくれませんでした。私は自分で買って読みました。良い本でした、面白い本でした。３回読みました。同じ本を３回続けて読むことは少ないですけども、３回読みました。この数字の話がたくさん出てくるんですけども、その中に、こういう数字が出てまいります。６という数字を割ることができる約数という数字は、１と２と３ですね。この１と２と３を足すと６になりますね。つまり、自分を割ることができる数字を足すと、自分の数字に戻るという数字が、これが６。６の次は２８、２８を割ることができる数字は、１と２と４と７と１４。これが２８を割ることができる約数です。この数字を足すと２８になる。次に、２８の次は４９６。間にはありません。４９６を割ることができる約数は１、２、４、８、１６、次が３１、６２、１２４、２４８なんです。これを足すと、４９６になる。４９６の上は、８，１２８。皆さん、私がいい加減なことを言ってるか、言ってないか、どうぞ記録しといて、後で本を買って見てください。間違いないですから。８，１２８の上はですね、３，３５５万３３６、これも間違いないです。なんとその上は、８５億８，９８６万９，０５６、そういう数字なんです。この数字も、いずれも、約数を足せば元の数字に戻る、そして、間にはない。もうひとつ、この数字には意味がありまして、６を割ることができる数字は、１、２、３で順番になってますけども、

２８は１、２、４、７、１４というふうに、飛んでますね。これを、１、２、３、４、５、６、７と順番に足していくと、７まで足すと２８になる。４９６はですね、１から３１まで足していくと４９６なる、という２種類の性格を備えております。なんで、こんな数字を持ち出してお話しをしたかといいますと、ただ、私が、８５億８，９８６万９，０５６と言ったり、３，３５５万３３６というような数字を言っただけですと、皆さんからすると、なんの存在意義もないですね。しかし、この数字にはこういう意味がありますよと言うと、その数字の意味がはっきりするわけです。人間の同じでして、ただ、生きているだけ、ただ心臓が動いているだけ、ではその人の存在意義があるとは言えません。私はこういうことを心に誓って、実行しています、こういうことで、小さなことではあるけども、社会に貢献する、後世の人たちのためにこれをやっているという事が２つも３つも５つも６つもできたときに初めてその人の存在価値というものが出てくるわけでして、できれば、皆さん方が、数多くの存在意義を示す実践をしていただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

では、もう残りの時間が少なくなりましたので、先ほどの、お約束した、坂村真民という方の詩、５小節の詩を全部ご紹介をいたします。

「騙されてよくなり　悪くなってしまっては駄目」。人間は、騙されても、騙されても悪くなってしまってはいけません。騙されても良くなっていく、これが大事でございます。次が、先ほどご紹介した、「いじめられて強くなり　いじけてしまっては駄目」。３番目は、「踏まれて立ち上がり　倒れてしまっては駄目」。人間は、どんな人でも踏みつけにされることはあります。踏みつけにされることは恥ずかしいことではないんですけども、踏みつけにされて、倒れたまんまでいるということは恥ずかしいこと、何度踏みつけにされても立ち上がれば良いんです。４番目は、「いつも心は燃えていよう　消えてしまっては駄目」。何かをしようと決意をしたとき、心に火が燃える、この火が燃えるといったことは、夢や希望をもったということですね。この夢や希望というものはですね、その人から逃げていくことはありません。ただ、反対に夢や希望から自分が逃げ出す人ばっかりです。こんな残念なことはありません。自分が描いた夢や希望から自分が逃げだしていく、こんなつまらないことはありませんので、自分が描いたら、いつまでも、この夢、希望に向かって走り続けていただきたい。５番目は、「いつも瞳は澄んでいよう　濁ってしまっては駄目」。目が濁るような事はしない、悪いことは考えない、良いことをいつも考えて、目がいつも輝いているような生き方をしていただきたいですね。よからぬ事を考えたりするだけでも、目が濁ります。私は新聞でも、人を殺したとか、人を騙したというような記事は、開くと見出しくらいは目に入りますけれども、中は詳しく読まないんです。自分の心を汚すような記事は読まないんです。読んだって何の参考にもならないでしょう。どうやって人を殺したかってことが、詳しく読んで、後々参考になるということはありませんですね。そんなの参考にしようと思ってたらとんでもない話でございますけれども、どうか心を汚すような記事は読まない、皆さんが読まなければ、新聞もそういうことを記事にしなくなります。そして、心が温まるような記事ばかりになり

ますよ。できれば、新聞、報道になるようなそういう世の中にしていただきたいですね。なぜ、報道が、あういうのをどんどんやるかというと、皆さんが見るからです。好んで見る人がいるから、書くわけです。どうか、そういうものは見ないという人生を歩んでいただきたいと思います。

今日は、つたない話を最後まで聴いていただきまして、ありがとうございました。

騙されて良くなり
悪くなってしまっては駄目

いじめられて強くなり
いじけてしまっては駄目

踏まれて立ち上がり
倒れてしまっては駄目

いつも心は燃えていよう
消えてしまっては駄目

いつも瞳は澄んでいよう
濁ってしまっては駄目